

「田園」(ベートーヴェン作曲 交響曲第6番)における 生物多様性

桜谷 保之

農学部環境管理学科

Biodiversity in the Pastoral Symphony of Beethoven

Yasuyuki SAKURATANI

*Department of Environmental Management, Faculty of Agriculture, Kinki University,
Nakamachi, Nara 631-8505, Japan*

Synopsis

The biodiversity in Beethoven's Pastoral Symphony is presented for discussion. The season of this symphony was inferred to be early summer, according to the song of birds (2nd movement), and the other motives of this symphony. Beethoven had recognized at least three species of birds; nightingale, quails, and cuckoo, and might have had a great interest in many plants and animals based on the many motives of this symphony. In this symphony, especially the final movement, Beethoven arrived at a conclusion of coexistence of nature and humans.

Keywords: Pastoral Symphony, Beethoven, Biodiversity, Satoyama (Coppice)

1. はじめに

近年は日本では里山が注目され^{1), 2), 3)}世界的にも“Satoyama”ということばが定着しつつあります。里山は広義には山と周辺の田畑、民家、ため池等も含んだものとして使われていますが²⁾、最近では「田園」という言葉も使われはじめています。「田園」には田畑とか田舎とか郊外とかいう意味があり、広義の里山とほぼ同じ意味と考えられます。

ここで取り上げる「田園」はドイツの作曲家ベートーヴェンが1808年に作曲(完成)した第6番目の交響曲で、その表題のとおりヨーロッパ(ウィーン郊外)の田園からの印象を交響曲にしたものです⁴⁾。

この交響曲は5つの楽章から構成されており、それぞれにベートーヴェン自身によって副題が付けられています。

第1楽章「田園に着いたときの愉快的気分」

第2楽章「小川のはとりの情景」

第3楽章「いなかの人々の楽しい集い」

第4楽章「雷雨、嵐」

第5楽章「牧歌。嵐のあとの喜ばしい感謝の気持ち」

このような構成になっているのですが、この中でベートーヴェンは田園のいろいろな生きものを音楽で表しているわけではありません。ただ、第2楽章の終わりで、カッコウ、サヨナキドリ、ウズラの鳴き声を楽器で表現していて、だれが聞いてもそれとわかりますが、単なる模倣ではなく音楽的に大変優れた表現になっています。

では、これも含めて、ベートーヴェンはどれだけ田園の生物多様性に関心を寄せ、この「田園」にどのように盛り込まれているのでしょうか。もちろんこれは大変難しい問題で、生前のベートーヴェンに聞かないとわからないわけですが、それは不可能です。また、「田園」の中の生物多様性を扱った報告は見当たらないようです。

ここでは、あくまで「田園」の音楽からそれを想像するに過ぎないのですが、ベートーヴェンが

どれほど田園の自然や生物に関心があったかを探ってみたいと思います。

2. 「田園」の季節

ヨーロッパにも日本と同様、春、夏、秋、冬の四季があります⁵⁾。この「田園」はどの季節を扱っているのでしょうか。これまでに市販されているディスク（LPやCD）のライナーノート（ジャケットに記載されている解説文）には初夏と書かれているものが多いようです。曲想からしても明らかに盛夏や冬ではないようです。すでに述べましたように、第2楽章の最後には3種類の小鳥の鳴き声が模倣されています。一般に野鳥には繁殖期のさえずりと冬季などの地鳴きとがあります。第2楽章の3種類の野鳥の鳴き声は明らかにさえずりとわかります。大部分の野鳥は繁殖期の春から初夏にさえずりますから、この「田園」は季節的には初夏の田園を表現していることは間違いありません。

また、四季のある地域では多くの生物は春から初夏に活発に活動、繁殖を行います。生命が躍動する季節です。第1楽章、第2楽章、第5楽章からは特に、そうした生き生きとした生命の躍動が強く感じられます。これが、盛夏や秋、冬ならば、こうした「田園」にはならなかったはずです。盛夏は日本では、暑すぎて、野鳥もあまりさえずりませんし、かなりの種類の昆虫は夏眠（越夏）します^{6), 7)}。ベートーヴェンが作曲活動をしていたオーストリアでは、日本ほどではありませんが、やはり盛夏には野鳥のさえずりは少ないと思われるます。

第3楽章には「いなかの人々の楽しい集い」というサブタイトルが作曲者自身によって付けられています⁴⁾。これは農作物の収穫を祝い、感謝している場面の印象と思われます。収穫祭というと日本では主要作物であるイネの収穫を中心として秋に集中しますが、ヨーロッパでは主要作物のコムギの収穫は初夏に行われます⁸⁾。従って、第3楽章も初夏の農村を舞台に作曲されたものと思われるます。

第4楽章は「雷雨、嵐」ですが、ここでは生物ではなく気象が扱われています。ヨーロッパでは台風の襲来はないので、ここでの嵐は寒冷前線の通過を表現していると思われるます⁹⁾。季節的には

やはり初夏が多いようです。筆者は9月ですが、ハンガリーのブダペストで激しい雷雨と強風を体験したことがあります。これは日本の場合よりもかなり激しいような気がしました。

3. 「田園」における生物多様性

「田園」交響曲は初夏の田園の印象を音楽にしたものとし、季節的にも生物の種類はかなり多様と考えられます。ベートーヴェンがどれほど生物の種類を知っていたかは、不明ですが、第2楽章の小鳥のさえずりの表現で聴くように、少なくともカッコウ、サヨナキドリ、ウズラの3種類を識別していたことは間違いありません。また、散歩中にホオジロについて弟子に尋ねているとも記されています¹⁰⁾。しかも、この曲が作られた時にはすでに聴覚を殆ど失っていたので、以前に聴いた小鳥のさえずりを音符にしたものと思われるすし、心で聴いたとも言われています。それにしても、驚くべきメロディーになっています。もし、風景だけの印象で、生きものに無関心だったら、こうした曲にはなっていない、もっと平板な曲になっていたと思われます。

以下、各楽章について、自然や生物多様性の観点から鑑賞してみたいと思います。なお、本文中で登場する曲の部分は楽譜（総譜）¹¹⁾の各楽章の小節数と代表的なCD²¹⁾の演奏時間（例えばCD I : 04' 05" ~ 05' 34"は第1楽章の4分5秒から5分34秒の部分）で示しました。

1) 第1楽章「田園に着いたときの愉快的気分」

曲は初夏の田園のさわやかな気分で開始されます。畑や牧草地、丘陵地といった田園の風景が自然と私たちの周りを包んでくれます。しかし、こうした田園の風景だけでしたらかなり平板な曲想になっていたかもしれません。具体的には示されていませんが、ベートーヴェンが田園に生活するいろいろな生物に対して、鋭く観察してそれらをこの第1楽章にいろいろな形で登場させているという耳で聞くと、そのように聞こえてくるはずで（例えば、124 ~ 134小節（CD I : 02' 22" ~ 02' 35"、04' 55" ~ 05' 08"）、175 ~ 186小節（CD I : 05' 51" ~ 05' 56"）、221 ~ 232小節（CD I : 06' 42" ~ 06' 47"）、187 ~ 197小節（CD I : 06' 05" ~ 06' 09"）、237 ~ 239小節（CD I : 06' 54" ~ 06' 59"））。それは小鳥や草花であったりする

ようです。

そうして、こうした田園の風景や生きものたちが、ベートーヴェンを楽しみ気分にしたことは間違いありません。いたるところに、こうした田園の生きものたちに対するベートーヴェンのいつくしみを感じられます。(例えば、67～74小節(CD I : 01' 19"～01' 27"、03' 54"～04' 02")、341～348小節(CD I : 08' 59"～09' 07"))。

単なる田園の描写でしたら、決してこうした曲想にはならなかったと思われます。

2) 第2楽章「小川のほとりの情景」

第1楽章とは異なり、かなりゆっくりとしたテンポで曲は流れていきます。田園の中を流れる小川のほとりに立ち止まって、あるいは散歩しながら小川の流れ、そうしてそのほとりの情景、いろいろな生きものの生活の様子が見事に音楽に生かされています(例えば、47～49小節(CD II : 02' 45"～03' 24")、58～66小節(CD II : 06' 05"～06' 17"))。

曲は終始、さらさらと流れる小川の情景を表現し、決して滞ることはありません。ここでも、ベートーヴェンはいろいろな生きものに関する生態さえも表現しているようです。

そして、この楽章の最後は、3種類の野鳥のさえずりが音楽に表現されています(129～136小節(CD II : 12' 50"～13' 06"))。すでに述べましたようにそれらは、サヨナキドリ(Nachtigall)、ウズラ(Wachtel)、カッコウ(Kuckuck)で、いずれもヨーロッパでは夏鳥で、初夏に美しい声でさえずります^{12), 13)}。この田園を作曲した時にはベートーヴェンはすでに聴覚を失い、鳥の鳴き声も殆ど聞こえなかったと言われています(例えば、近衛¹⁰⁾)。以前の耳が聞こえた時の記憶で、作曲したにちがいないのですが、各野鳥のさえずりを見事に音楽にしています。少なくともベートーヴェンはこれら3種類の野鳥をはっきりと識別する能力を持っていたことは確かです(楽譜¹¹⁾)にもこれらの3種類の野鳥の名前が指定されています)、これから推察しますと、他の野鳥にもかなり関心を示し、識別できたのかもしれませんが。

サヨナキドリは日本では夜鶯(ヨルウグイス)などとも訳されています。ツグミ科の野鳥ではなく、ヒタキ科で、コマドリに近い野鳥です^{13), 14)}。ヨーロッパでは夏鳥で、特に夕刻や朝方に美しい声でさえずります。

ウズラは日本では、各地に生息していますが、個体数は少なく¹⁵⁾、レッドリスト種に選定されている地域もあります。里山地域に生息しますが、ヨーロッパではその声の美しさからよく飼養されていたようです。

カッコウは日本でも夏鳥で、そのさえずりは誰でも知っている有名な野鳥です^{13), 15)}。ただ、生息環境は里山よりは奥山になるようです。盛夏にはさえずらなくなり、繁殖を終え、秋にはまた、南方に戻ってきます。

ベートーヴェンがこれらの野鳥のさえずりを第1楽章ではなく、第2楽章に入れた理由をはっきりしませんが、ゆったりとし小川の情景にこれらの野鳥のさえずりがふさわしく、また、テンポやメロディーも同調しているようです。

3) 第3楽章「いなかの人々の楽しい集い」

この楽章は、前の2つの楽章と違って、自然なものは生物そのものではなく、田園の人々の生活を音楽にしています。ヨーロッパの主要な作物であるムギ類⁸⁾の収穫を祝うような、つまり収穫祭のような音楽です。

広い意味で里山は畑や水田、牧草地を含み、農作物も生物ですから、それらも生物多様性の恵みと考えることができます。この楽章はそうした栽培植物や家畜等に対する収穫の喜びと感謝の気持ちを音楽にしているようです。日本の神楽を連想するようなメロディーもあります(165～180小節(CD III : 01' 50"～02' 06"、04' 26"～04' 42"))。ベートーヴェンは人々も自然の一員として考えていたようです。

4) 第4楽章「雷雨、嵐」

第3楽章の楽しい集い中に突然、雷、嵐が襲ってきた様子の音楽です。ヨーロッパでは台風は襲来することはないですから、ここでの嵐は、前に述べましたように、寒冷前線の通過に伴う、雷雨や強風を意味しているようです。

ベートーヴェンが生きていた時代には、まだ天気予報は発達しておらず、観天望気といって、一地点の天気の変化から、予測していたに過ぎません。従って、前線の通過も前もって予測できなかったわけで、突然の襲来の人々はかなり驚き、自然への恐怖を抱いたことと思われます。

自然は野鳥や草花のように人々を楽しませ、いやしてくれる効果のある反面、人々の生活を脅かす面も持っていることを、ベートーヴェンは訴え

ているようです。

今日では天気予報の当たる確率は格段に向上し、不意に台風や前線の襲来に見舞われることはなくなりましたが、昔はいつ襲ってくるかわからないこうした自然現象に対してベートーヴェンは喚起を促していたようです。現在でも地震の予知は困難ですし、台風や前線の襲来は予測できてもそれらをコントロールすることはできません。

一方、植物の繁茂や害虫の発生はある程度予測はつきますが、天気予報に比べてまだかなり精度は低いようです。しかし、それらはある程度制御できます。残念ながら多くの場合、生態系にかなりの影響を与えるような化学的農薬等の力を借りてですが。

この楽章では、ベートーヴェンは、自然の脅威に対する人間の非力、ひいては自然の偉大さを表現しているようでもあります。この「嵐の楽章」を第2楽章の後ではなく第3楽章の後に続けて演奏するようにしてあるのも、このことを裏付けているような気がしてなりません。

5) 第5楽章「牧歌。嵐のあとの喜ばしい感謝の気持ち」

第4楽章のあとを受けて、嵐（寒冷前線）の去った、無事と喜びを表した楽章です。しかし、ここではベートーヴェンはさらに自然と人との調和と自然に対する感謝の気持ちを強く表現しているようです（例えば、52～60小節、(CD V : 03' 32"～04' 11")）。この楽章だけは、自然の具体的な情景や生きものの多様性が感じられません。むしろ人間（時にベートーヴェン自身）のかなり精神的な面が音楽に表現されているようです。自然と人間の調和ないしは共生がこれほど感じられる音楽は現在でもないように思われます。ベートーヴェンは今から200年も前に、こうしたテーマを考えていた様子が、この音楽からはっきりと伝わってきます。

ベートーヴェンはカトリック教徒と言われていますが¹⁶⁾、いろいろな自然、生きものに対して神の存在を意識して、それらに対する感謝の念を抱いていたようです（例えば、9～44小節、(CD V : 00' 18"～01' 58")）。これは、大木などを神木とするような日本の神に対する意識と通じるところがあるようで、大変興味深いことと思われま

こうした神と人間に対する尊敬の念をベートー

ヴェンは交響曲第9番（合唱）の、特に第4楽章で表現していますが、そこでは管弦楽の他にさらに声楽も用いています。「田園」の第5楽章には、声楽は用いていませんが、交響曲第9番の第4楽章に匹敵するような表現力を持っているようです。その点、声楽を用いた第9交響曲よりも上回っているように私には感じられます。単なる田園の表現ではなく、ベートーヴェンはこの「田園」の第5楽章で、かなり精神的な高揚をみせているように思われます。ベートーヴェンだからこそ到達できた一つの偉大な自然観と思われる¹⁶⁾。

4. 現地を訪ねて

筆者はこれまでに、国際学会の参加や個人的な旅行でヨーロッパを8回訪れています。その際、できるだけ現地の田園風景にひたり、その特色に注目してきました。

特色として、広々とした大地がゆるやかな起伏を伴って広がっており、そこには牧草やトウモロコシなどが栽培されているといった景観が多いようです。この緑色の草原的景観の中に赤や白、黄色などの民家が点在し、まさに田園風景といった感じです。日本の本州のような、田畑のからすぐ里山となっている風景はあまり見られませんでした。一方、スイスのように牧草地を背景にアルプスがそびえ立っている光景も、田園という印象を与えます。

2010年にはベートーヴェンが中心的に作曲活動を行ったウィーンに行くことができました。

8月29日から9月1日までの短い間でしたが、ベートーヴェンゆかりの場所を訪れることができました（図版1－図版4）。

ベートーヴェンがよく散歩し、「田園」交響曲を作曲したハイリゲンシュタットに行き、その丘に登りましたが、当時（1808年ころ）と同様、ブドウ畑も見られ、眼下には美しい田園都市が広がっていました。第2楽章を作曲したと言われて^{17), 18), 19)}、ベートーヴェンの散歩道の小川にも行ってみました。周りは高木が茂り、近くまで住宅が建ち、当時の面影はほとんど残されていないようです。恐らく、ベートーヴェンは、牧草地の間を流れる、明るい小川とそのほとりの光景の印象を曲にしたにちがいありません。もちろ

ん、ベートーヴェンが散歩したのは、ここだけではなく、かなり広い範囲の田園地帯を歩いていたように思われます²⁰⁾。今回、ハイリゲンシュタットでは、ブナの類やフウロソウなどの野草もたくさん確認できましたが、散歩好きのベートーヴェンはきっと、こうした木々や草花にも注目し、その多様性や美しさに心を癒されていたと思われます。

ハイリゲンシュタットでは、ベートーヴェンゆかりの住居や銅像も訪れることができ、人一倍、自然を愛したこの作曲家の一面に触れることができたような気がして感慨深いものがありました。

5. おわりに

私たち研究者は、里山や生きものを研究する場合、その研究対象をじっくり観察し、場合によりいろいろ測定、観測してデータを収集して、分析、考察して論文に仕上げます。ベートーヴェンはその鋭い自然観察力と洞察、そして自然への思いやりで、生きものや自然を見つめているようです。そして、第5楽章では自然と人間の調和という一つの結論に到達したと考えられます。この「田園」は音符で書いた生物多様性や自然に関する論文と言えると思います。生物多様性が注目されている今日、200年も前にこうした曲が作られたことは、本当に驚異的で、また尊敬の念を強く抱くものです。

6. 要約

ベートーヴェン作曲交響曲第6番「田園」における生物多様性について、考察した。初めに「田園」の季節について考察してみたが、よく言われているように、初夏の情景と考えられた。ベートーヴェンは少なくともサヨナキドリ(ナイチンゲール)、ウズラ、カッコウ、の3種類の野鳥を識別でき、これ以外にホオジロにも関心があったと思われる。その他にも、曲想からして、いろいろな生物をこの曲に取り入れていたと思われ、それらに対する、いつくしみの感情も強かったと思われる。第5楽章では、自然と人間の調和という結論に達していたように推察された。

7. 参考文献

- 1) 石井 実・植田邦彦・重松敏則(1993) 里山の自然をまもる. 171pp. 築地書館.
- 2) 石井 実 (監修)(2005) 生態学からみた里やまの自然と保護. 242pp. 講談社サイエンティフィク.
- 3) 広木詔三(編)(2002) 里山の生態学 その成り立ちと保全のあり方. 333pp. 名古屋大学出版会.
- 4) 属 啓成(1963) ベートーヴェン 作品編. 819pp. 音楽之友社.
- 5) 高橋浩一郎(編)(1974) 世界の気象. 326pp. 毎日新聞社.
- 6) 桜谷保之・伊藤ふくお(2002) チョウ類成虫の越夏と越冬. 昆虫と自然. 37 (13). 19 - 22.
- 7) 桜谷保之・初宿成彦(監修・著)(2009) テントウムシの調べ方. 148pp. 文芸出版.
- 8) 二宮書店編集部(編)(2011) データブック オブ・ザ・ワールド—世界各国要覧と最新統計— 2011年版. 478pp. 二宮書店.
- 9) 大野義輝・平塚和夫(1964) お天気歳時記. 286pp. 雪華社.
- 10) 近衛秀麿(1970) ベートーヴェンの人間像. 236PP. 音楽之友社.
- 11) 音楽の友社(土田英三郎:解説)(2010) ミニチュア・スコア(OGT 2106) ベートーヴェン 交響曲第6番 ヘ長調 《田園》 作品68. 152pp. 音楽之友社.
- 12) 島田瑠里・赤 勘兵衛(1997) CDブック 歌う鳥、さえずるピアノ. 60pp. 草思社.
- 13) 山階芳麿(1986) 世界鳥類和名辞典. 1140pp. 大学書林.
- 14) Hanzak, J. (1965) The Pictorial Encyclopedia of Birds. 582pp. Hamlyn.
- 15) 蒲谷鶴彦・松田道生(2001) CD Books 日本野鳥大鑑 増補版. 447pp. 小学館.
- 16) アドルノ, T.W. (大久保健治 訳)(2010) ベートーヴェン 音楽の哲学. (改訂版). 425pp. 作品社.
- 17) ロックウッド, L. (土田英三郎・藤本一子 監訳)(沼口 隆・堀 朋平 訳)(2010) ベートーヴェン 音楽と生涯. 893pp. 春秋社.
- 18) 属 啓成(1970) ベートーヴェン 生涯編.

694pp. 音楽之友社.

- 19) 福原信夫 (1987) その小路の家にベートー
ヴェンが住んでいた. 383pp. 芸術現代社.
- 20) 渡辺 佐 (2010) オーストリア辺境の旅.
222pp. サンライズ出版.
- 21) CD: 指揮: カール・ベーム、管弦楽:
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団. 1971
年5月録音. ドイツ・グラモフォン:
POCG-2311.



写真1. ウィーン郊外ハイリゲンシュタットの駅



写真2. ハイリゲンシュタットの田園風景(1)



写真3. ハイリゲンシュタットの田園風景(2)



写真4. ハイリゲンシュタットの田園風景(3)



写真5. ハイリゲンシュタットの里山風景



写真6. ハイリゲンシュタットの丘からハイリゲンシュタットの町を望む

図版1. オーストリア ウィーン郊外のハイリゲンシュタットの風景

2010年8月29日（写真は筆者撮影）。ベートーヴェンはここをよく散歩し、「田園」交響曲の曲想を得、作曲をしたと言われています。ヨーロッパの典型的な田園風景と思われ、広々とした牧草地や畑が広がっています。所々に丘があり、日本の里山を思わせる景観も見られます。



写真7. ハイリゲンシュタットの丘を散策する人々



写真8. ブドウ畑

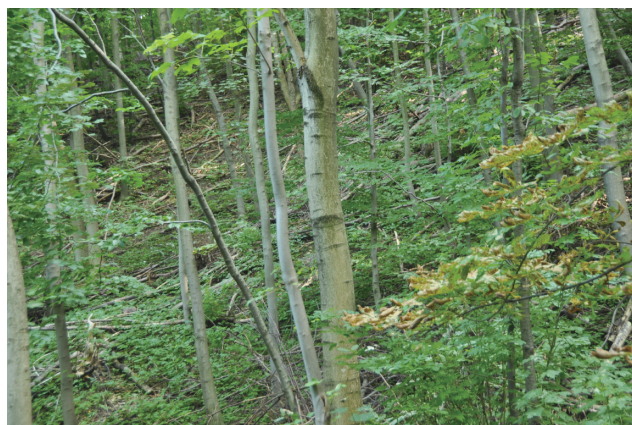


写真9. 林の様子



写真10. マロニエ（日本のトチノキに近縁）



写真11. ブナの1種

写真12. 路傍の野草
フウロソウの類等が自生

図版2. ハイリゲンシュタットの風景と見られた主な植物

2010年8月29日（写真は筆者撮影）。昔ながらのブドウ畑も見られ、日本の里山でも見られる、ブナやトチノキなども観察されました。



写真 13. ベートーヴェンの散歩道



写真 14. ベートーヴェンが散歩した小川のほとり(1)



写真 15. ベートーヴェンが散歩した小川のほとり(2)

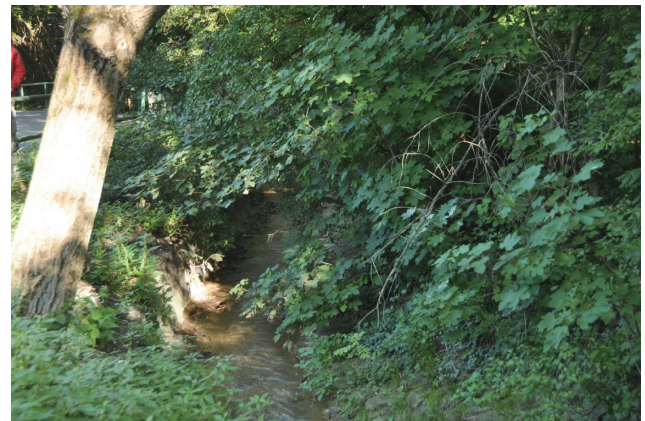


写真 16. ベートーヴェンが散歩した小川のほとり(3)

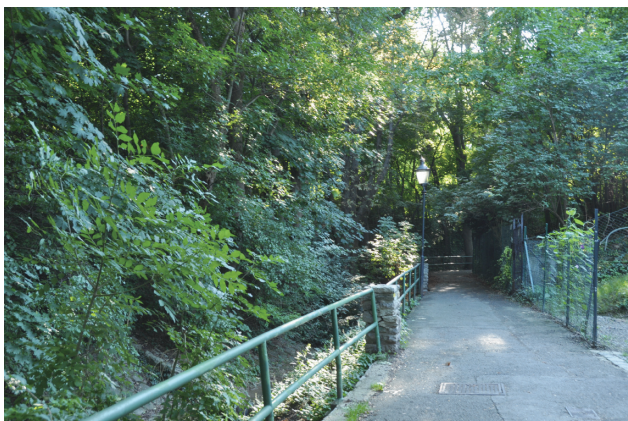


写真 17. ベートーヴェンが散歩した小川のほとり(4)



写真 18. ベートーヴェンが散歩した小川のほとり(5)



写真 19. ベートーヴェンが散歩した小川のほとりに続くエロイカ（英雄交響曲）通り



写真 20. ベートーヴェンが散歩した小川のほとりの入り口

図版 3. ベートーヴェンがよく散歩した小川

2010年8月29日（写真は筆者撮影）。ここで、「田園」の第2楽章の曲想を得たと言われています。当時は、もっと開けており、日当たりもよかったと思われます。現在は、周りに高木が茂り、昔の面影はないようです。



写真 21. ベートーヴェンハウスの表示



写真 22. ベートーヴェンハウス



写真 23. ベートーヴェンハウスの中庭

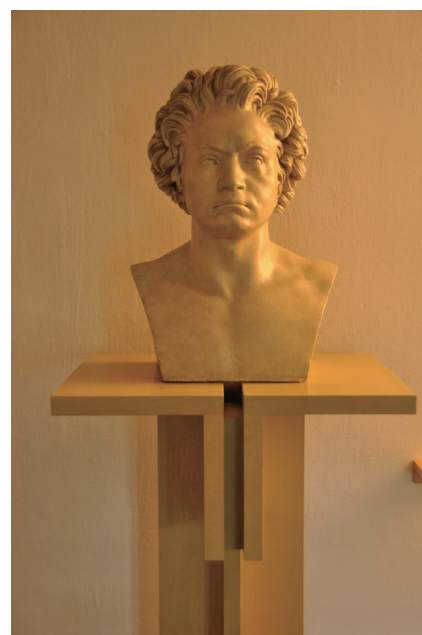


写真 24. ベートーヴェンハウス内にある胸像

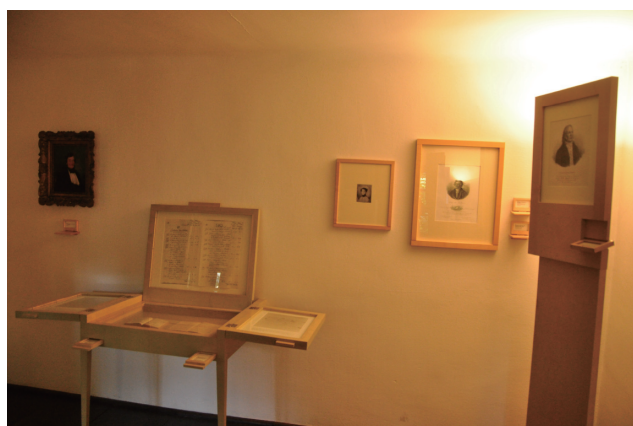


写真 25. ベートーヴェンハウス内にある資料



写真 26. ハイリゲンシュタットの公園にあるベートーヴェン像